

松文産業(株)旧女子寮「精華寮」の建築 (3) 玄関棟と講堂棟

多米 淑人*, 吉田 純一*

The Buildings of the Dormitory called `Seika Ryo` in the Matsubun Industry Co., Ltd. (3) Entrance Buildings and Lecture Building

Tame YOSHIHITO and Yoshida JUNICHI

This article is a survey about the construction of old girl dormitory which the Matsubun industry Co., Ltd. owns. This report considers the present conditions and an old state of entrance building and the lecture hall building. The old entrance porch was made of stone and it had a Western-style design. The lecture hall had the platform inside.

Keywords: Matsubun Industry Co.,Ltd., dormitory, Seika Ryo, entrance buiding, lecture bulding state

1. はじめに

先の2稿では松文産業(株)の旧女子寮「精華寮」を構成する建築のうち、3棟の宿舍棟について、各建物の現況とそれらの復元について考察した。本稿では宿舍棟とともにやはり「精華寮」を構成している玄関棟と講堂棟について報告する。

なお、本稿内の古写真の番号は後掲の「(4) 古写真にみる寮内の生活風景」に示す古写真一覧の番号を用いている。

2. 玄関棟

2-1. 玄関棟の現状

玄関棟は、一号棟の東端に位置している。一見、入母屋造、棧瓦葺の独立した一建物にみえるが、後述するように本来は一号棟の屋根に入母屋屋根を載せて増築・改修されたものである。ただし、ここでは便宜上、一建物としてみなし、玄関棟と呼ぶことにする。

桁行6間、梁間5間、入母屋造・棧瓦葺の木造2階建ての建物で、入母屋の破風を南正面に向ける妻入りである。1階は玄関部で、前方の約2間分を4本の独立角柱を立てる吹き放しの玄関ポーチとする。その奥方にシャッターを入れた入り口があり、その両壁は腰部を洗い出しのコンクリート、それより上方を白漆喰の大壁仕上げとしている。

* 建築学科

入り口を入ると、内部はコンクリート床で、左右に6畳ほどの小部屋があり、奥方の2間分は一号棟の廊下と東の講堂棟を結ぶ通路になっている。背面の中庭境の壁は額縁を伴った縦板張り、その筋から2間前方に現在は小部屋の隅柱を兼ねている2本の角柱があり、その柱頭にはキャピタル、柱脚の礎石にも洋風の意匠がみられる。また、天井は縁取りされた漆喰天井であり、外壁と同様玄関内部にも洋風の意匠が随所にうかがえる。この他、玄関奥の左寄りに中庭へ張り出して接客用の応接間とみられる部屋(8畳大)がみられるが、この内部にも洋風の意匠が認められる。

玄関棟の2階へは、「染判定室」に改修されている一画の裏側(西側)背後にある一号棟の東階段から上がる。部屋は前後2室に分かれ、前方の部屋は桁行2間、梁間5間、20畳大で、1階玄関ポーチの真上に位置する。後方の部屋は桁行4間、梁間4間半、36畳敷の広い部屋で、玄関内部の真上にあたる。前室の天井は格天井、南面と西面の各柱間には現在はガラス戸と雨戸用のサッシュ戸が入っている。後室の広間は天井が棹縁天井、桁行方向の東面は中央2間が襖4枚で間仕切られ、ここには以前、仏壇が置かれていた。そのためにこの部屋を「ブツマ」と呼んでいる。この仏壇の両脇は1間幅の押入れで、それぞれ襖2枚で仕切られている。



写真 01 玄関棟外観



写真 02 玄関棟ポーチ



写真 03 玄関棟1階内部



写真 04 応接間



写真 05 前室



写真 06 広間(ブツマ)

2-2. 旧玄関

現在の玄関棟が増築・改修されたものとなれば、それ以前の玄関はどのようなものであったのか。現建物の柱などの部材の痕跡からはわからないが、幸いにも創建当時と思われる玄関の古写真が残されている。これら古写真によれば、当初の玄関構えは、東側の講堂棟まで延びる一号棟の1階から突き出た、洋風の意匠をもつ玄関ポーチ状のものであったことがわかる。

①玄関ポーチ（古写真 11・12）

古写真 11・12 からわかるように、当初の玄関は一号棟の 1 階から玄関ポーチが張り出す形式であった。このポーチは石造で、前面に強いエンタシスをもった 2 本の円柱が高い礎石の上に立ち、その両脇には煉瓦積みの袖壁もみられる。ポーチの上部はやはり石造で、アーチ状の特徴的な手すりを廻らすテラスが設けられていたこともわかる。古写真 2 から堂々とした、格調高い玄関ポーチの様子をうかがうことができる。



古写真 11 玄関ポーチ (1)



古写真 12 玄関ポーチ詳細

②玄関内部（古写真 13・14・15）

古写真 13・14・15 によって玄関の内部の様子がわかる。入口部の床はタイル敷とみられ、奥方の板床は寄木の木タイル貼で、上がり縁境には角柱が 2 本独立して立っている。また奥の壁面は内法までが板壁で、それより上方の壁や天井は白漆喰塗であった。

このように当初の玄関内部は洋風の意匠が施されたものであったことがわかる。ちなみに上がり縁境の 2 本の独立柱や漆喰天井などは今もそのまま残っている。

古写真 13 と 15 は同じ角度の写真であるが、古写真 13 では一号棟の寮室へ通じる 2 間持ち放し柱間がみられるのに対し、古写真 15 では前方 1 間が間仕切られている。この部分の柱や腰板は周囲とは色合いも異なり、新たに改変されたことがわかる。齋藤氏の記憶によれば、ここに舎監部屋があったという。



古写真 13 玄関内部 (1)



古写真 14 玄関内部 (2)



古写真 15 玄関内部 (3)

2 - 3. 玄関棟に残る増築・改修の痕跡

古写真にみられる当初の玄関ポーチが取り壊され、現在の入母屋屋根の玄関棟がいつつくられたのかは明らかでない。しかし、現在の玄関棟が写る古写真に「合資会社・松文機業場」との看板がみえることから、松文産業が組織変えされた戦前においてすでに現状の玄関棟に改修されて

いたものと思われる（立平氏のご教示による）。

現在の玄関棟の屋根裏には、一号棟の屋根が瓦を剥いだ状態でそのまま残っている。しかも社屋の全貌を鳥瞰している古写真 1 からわかるように一号棟の屋根の北面は今でもそのまま講堂棟まで延びている。したがって、現在の玄関棟の入母屋の屋根は、一号棟の屋根上に載せてつくられていることがわかる。そして、その入母屋屋根を前方に張り出して、2 階建てとし、張り出し部の 1 階は前面に 4 本の独立柱（木）を立てて玄関ポーチ、その上方の 2 階部分は 20 畳大の部屋を新たに増設して現在の状態に整えられたのであった。

こうした改修の痕跡は、屋根以外にも随所にうかがえる。たとえば、玄関棟 2 階の広間（ブツマ）と前室 20 畳間の境、すなわちこの面は元来一号棟の南側の外壁面であったことになるが、この境にたつ柱にはいずれも窓上の庇を支えていた腕木止めのボルト穴が残っていたり、外壁に塗られていたペンキ跡が認められる。これらの痕跡は以前この柱筋が外壁面であったことを示している。



古写真 1 社屋全景

この他、現在シャッターが入っている 1 階入り口周りには、古写真 03 にみられる入り口の構えに合致する建具枠や内法材、束などの仕口跡が確認でき、内部にたつ 2 本の独立柱の脚元には元の上り縁框の断片がそのまま残されていて、こうした痕跡からも玄関棟の改修の一端を窺い知ることができる。



写真 07 玄関棟屋根裏



写真 08 ボルト穴



写真 09 上がり縁框跡

2 - 4. 2 階広間（ブツマ）（古写真 28・29・30）

以上のように、現在の玄関棟において、入母屋屋根や一号棟の南外壁面より前方に突き出た 1 階のポーチ部分および 2 階前方の 20 畳間は玄関棟の改修に伴って後に増築された部分である。これに対して、現在は玄関棟の中に含まれている 1 階の玄関内部と 2 階奥の広間（ブツマ）は、それぞれ一号棟の 1 階および 2 階の一部として存在していた。

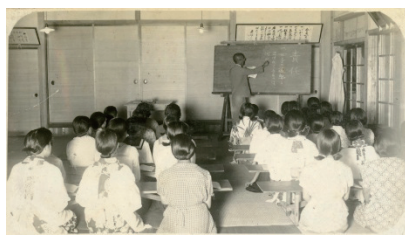
そして、現状において 2 階広間の西にみられる 28 畳の部屋は、広間に続く次の間になっているが、敷居や鴨居、天井の状態から梁間は北側 1 間と南側 3 間に分けられ、桁行は西面の押入れを含めて 3 間である。このように 3 間×3 間を基本とする構成はすでにみた寮室部と同じものであり、かつ 1 間幅の押入れが 3 つみられることも寮室と同じである。したがって、この 28 畳間も以

前は寮室であったと考えられる。

ところで、古写真 28～30 の 3 枚は、36 畳の広間（ブツマ）で行われた講演や講習、講座の様子を写したもので、これらの古写真から広間の室内の様相を伺うことができる。古写真 28 に「修養室」とあるように、「修養室」と呼ばれることもあったようであるが、天井は棹縁天井で、東面の中央 2 間の襖 4 枚立てやその両側 1 間の襖 2 枚立ての建具構成は今もそのままみられる。また、言い伝えの通り、中央 2 間の襖の奥に仏壇が置かれていたことも確認できる。この他、北面の窓（古写真 30）や南側前室境東寄りの開口部（古写真 29）の状態なども現状と変わらないことがわかる。



古写真 28 講演・講習会 (2)



古写真 29 講演・講習会 (3)



古写真 30 和裁 (1)

3. 講堂棟

講堂棟は玄関棟の東側に位置している。宿舍棟と同じく昭和 8 年の創建当初からすでにあったと伝わっている。梁間 6 間で、桁行は 33 間に及ぶ、木造平屋建ての長大な建物で、「精華寮」を構成する建物の中では最大の規模を有している。屋根は入母屋造、棧瓦葺で、玄関棟と同様、入母屋の妻面を正面南側に向けるために棟は南北に通っている。そして一号棟とは玄関を介してつながり、二号棟ならびに三号棟とは梁間 2 間、桁行 5 間の渡り通路を介して通じている。

3-1. 講堂棟の現状

講堂棟も以前は板床敷であったが、現在はすべて取り払われ、全面コンクリート床とし、前方の南正面にシャッター付の出入り口を設け、物資保管用の倉庫に転用されている。桁行の東面と西面は柱間ごとにガラス戸入りの 1 間幅の窓が連なるが、現在は内側からベニヤ板を張って塞がれている。天井も後世のもので、上方にもとの天井が残っているものの、現状から講堂の旧状を伺うことはきわめて難しい。

立平氏や齋藤氏からの聞き取りによれば、おもに前方を講堂、中ほどを食堂、後方を厨房としていたという。現在の天井をみると、両側面は窓鴨居上から斜め上方に持ち上げられ、中央部は南側の 6 間分が根太天井で、そのうち前方 4 間は 50～60 cm ほど低くなっている。これより奥の 11 間分は狭間が約 90 cm 四方の格天井、さらにその奥はやはり 60 cm ほど下がった合板張りの天井になっている。詳細な調査は行っていないが、こうした天井形式の違いは、この建物が講堂や食堂、厨房として使われていた往時の用途の違いを示唆しているものと考えられる。

また、齋藤氏によると、厨房の奥、すなわち講堂棟の北端部には寮生専用の共同浴場があった

という。現状ではその名残は伺えないが、後掲の古写真 18・19 にみられる浴場はここにあったものである。



写真 10 講堂棟外観



写真 11 講堂棟内部



写真 12 講堂棟天井

3-2. 古写真にみる講堂棟

以上のように、講堂棟は改修が激しく、現況から旧状を探ることは困難であるが、この講堂棟の古写真も残っており、以前の様子を具体的に知ることができる。

①外観（古写真 2・41）

古写真 2 にみるように、現在の講堂棟は前述した石造の旧玄関ポーチがついていた時期にすでにあったことがわかる。また、古写真 41 から講堂棟の外観がわかる。すなわち入母屋の破風を南正面にみせる外観形状は今と同じである。ただし、現在は正面東寄りの 2 間の柱間にシャッターを入れて入り口としているが、古くは柱間 6 間分すべて窓がとられ、小壁をはさんでその上方にも窓が設けられていた。ちなみにシャッター一部を除けば、上下の窓は現在もそのままである。

外壁の腰部と上下の窓の間の壁、そして上方窓上部などの壁面は、今と同じように南京下見板張とみられるが、これらの部分は付け柱や窓枠の白色に比べて黒っぽく写っている。現在の講堂棟の下見板には一号棟などの宿舎棟と同じく薄ピンク色のペンキが塗られているが、もし当時も同じピンク色だとしたらこれほど黒っぽく写ることはないと思われる。

しかも今回の調査において、一号棟の玄関脇や玄関棟 2 階広間の前室境の旧一号棟外壁部分などから緑系のペンキ痕を確認している。これらのことから、現在みられる薄ピンク色のペンキは後に塗られたもので、当初はもっと深みのある緑系色のペンキが塗られていた可能性が強く、講堂棟の下見板も同様であったと考えられる。緑系の色は光を吸収しやすく、そのために古写真 41 ではより黒っぽく見えるのであろう。なお、齋藤氏によると、講堂棟は茶系の濃い色であったという。また、薄緑色のペンキが塗られていたとの記憶もあるといい、創建後、何度かペンキの塗り替えがあったものと思われる。



古写真 2 一号棟外観(右端講堂棟)



古写真 41 鼓笛隊(後に講堂棟)

②内部（古写真 16・17・23・24）

前述のように現在の講堂の内部は大幅に改修されていて、ほとんど旧状を留めていない。しかし、残された古写真 16 や古写真 17 によって往時の様子を窺い知ることができる。内部は板床で、やや高めの腰は板壁、その側面上方には上下 2 段に連続して窓がとられている。天井は約 90 c m 四方の格天井が一面に張られ、上下の窓のほぼ中間からこの天井を突き抜けるように 1 間間隔に 2 枚挟みの斜材もみられる。これは天井上に架かるトラス組の陸梁を受ける斜材である。現状の天井の側面寄りが斜上方に持ち上げた状態になっているのはこの斜材を隠すためであろう。斜材の下端がわずかに見えている個所も随所にある。

講堂の名に相応しく正面には演壇が設けられている。その背面は漆喰壁で、幅広く縁取りした額縁の装飾を造り出し、中央に 1 間幅の鉄扉と思われる建具が嵌めこまれている。演壇の両脇は額縁付き腰板壁で、その左端はガラス戸 2 枚立て、右端はガラス戸 3 枚もしくは 4 枚立てとし、ともに後室への出入り口になっている。

古写真 16・17 には演壇の壁面から 2 間前方に下がり小壁がみえる。この小壁は現在もそのまま残っている。したがって、この小壁を頼りにすれば、演壇はこれより柱間 2 間分南寄りの柱筋に設けられていたことがわかる。すなわち、玄関へ通じる通路の南側柱筋に演壇背後の壁がたっていたことになる。そうなると、古写真において演壇の背面壁列の右端につく出入り口の前の通路が玄関へ通じていることにも矛盾しない。つまり、古写真 16・17 は、講堂棟の内部を北側から南に向かって演壇方向を撮影しているのである。

一方、これとは逆方向、すなわち、演壇の後方については、次稿に掲げる生活風景の一コマである食事風景の古写真 23・24 から伺え、中央の 2 間が壁で、その両脇がガラス戸を入れた出入り口で、ここから奥の厨房へ通じていたことがわかる。



古写真 16 講堂内部 (1)



古写真 17 講堂内部 (2)

③浴場（古写真 18・19）

古写真 18・19 はこの講堂棟の北端、すなわち厨房の北にあった寮生専用の浴場である。左手上方の窓の戸の仕様が違っているが、浴槽の形状や壁面や床のタイルの様子などは同じで、同一の浴場とみてよい。齋藤氏によると、左手にみえる浴槽は前後に分かれていたという。余談であるが、当時はシャワーなどの設備がなく、湯船のお湯を汲みだしていたから、入るのが遅くなると、浴槽のお湯が減ってしまい、体を沈めるにも大変だったという。なお、講堂棟よりやや後につく

られた休養棟にも浴場があったという。ただし、これは寮生専用のものではなく、従業員用であったという。



古写真 18 浴場(1)



古写真 19 浴場(2)

4. 結語

玄関棟、講堂棟について、以下のことが指摘できる。

- ①現在の玄関棟は、入母屋の屋根を一号棟宿舍の上から前方に補設し、1階を前面に4本の柱を立てた吹き放しのポーチに、その上方に2階の広間（ブツマ）の前室を増築したものである。
- ②以前の旧玄関は洋風意匠をもつ石造のポーチを張り出すものであった。
- ③一号棟に含まれる1階の玄関内部には柱や板壁、天井などに旧玄関に伴う洋風の意匠が残っている。
- ④講堂棟は内部に大きな改造がみられるが、古写真から前方に整った演壇を設け、板床で、斜の方杖がつき、天井は格間の大きい格天井で、整った室内構成であったことがわかる。

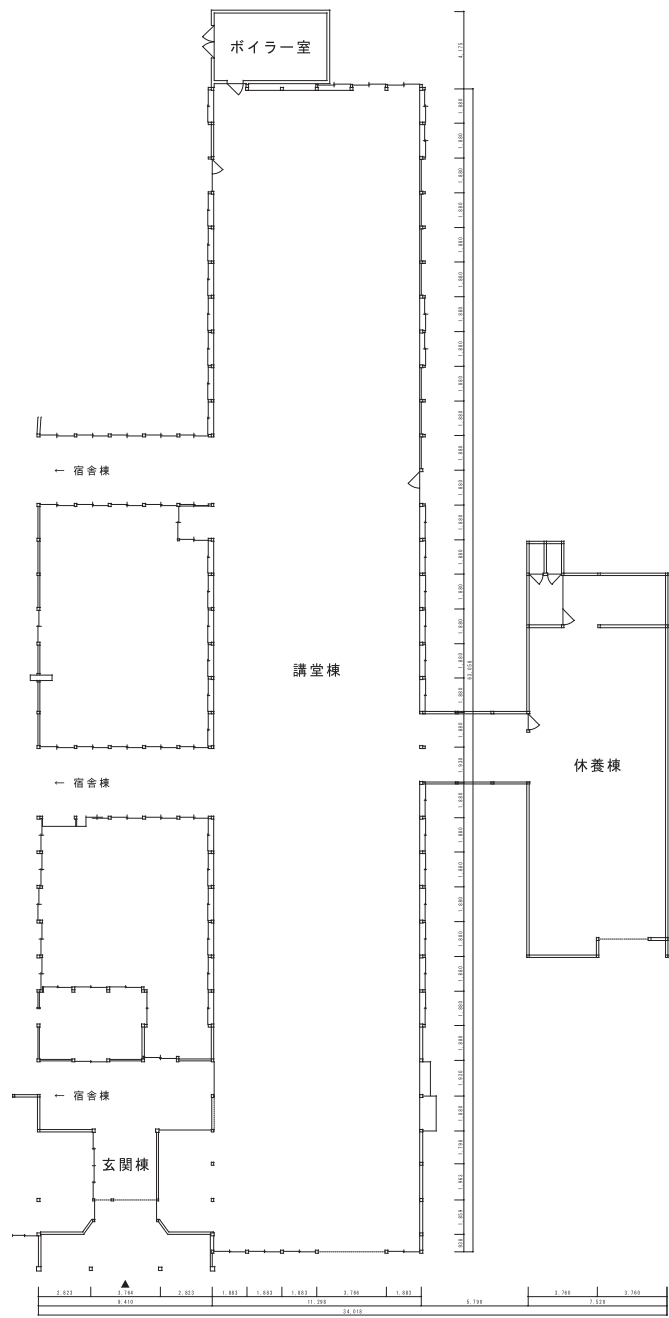


図 1
玄関棟および講堂棟、休養棟 1 階平面図 1/400

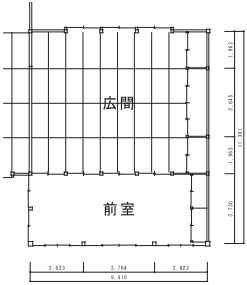


図 2
玄関棟 2 階平面図 1/400



図 3 玄関棟および講堂棟南面現状立面図 1/400

(平成 24 年 3 月 31 日受理)